

「目が開かれる」
(ヨハネによる福音書9:1-38)

この度の新型コロナウイルスは、人と人との関係を孤独に追いやる力があるように思います。ウィルス自体は生物の一つ、一つの被造物に過ぎません。これを利用して、荒れ野で主イエスを誘惑したような悪の力が働き、お互いを疑心暗鬼にし、関係を冷えさせようとしています。これは、まさにマタイによる福音書24章にある「多くの人の愛が冷える」という世の終わりの恐ろしさを連想させます。神は「人が一人でいるのはよくない」と創世記で言われているように、わたしたちの関係を結ぶ方です。逆に、悪の力とは、その関係を断ち切り、孤独へと人を追いやる力です。主イエスが伝えてくださった、隣人を愛して生きることにまことの豊かさがあることを、我々クリスチャンは信じています。今こそ、わたしたちクリスチャンは互いに信頼し、離れていても励まし合って、関係の豊かさをあらたにしましょう。そのためには具体的な実践が必要です。互いに手紙を書き合いましょう。互いに電話しても良い、FAXでも良いです。何よりも、互いを思い、祈り合いましょう。必ずその思いを神さまが届けてくださいます。福音とは、大逆転だ、と言われることがあります。たしかに、先週（大斎節第三主日）の福音では、主イエスとの出会いによって、サマリアの女性の渴きが癒され、彼女の負の烙印が、神の栄光を表すしるしへと変えられました。大逆転です。この度の事態についても、わたしたちの信頼がかえって深められるなら、この事態が神の栄光をあらわすことになるのです。まさに大逆転です。今こそわたしたちにできることがあります。それは、神に結ばれた交わりが揺らぐことがないことを信じることです。わたしたちを愛の絆でつなぎとめてくださる神を信頼し、今こそ互いに愛し合いましょう。

大逆転。今週の福音でもまた、負の烙印を押された一人の人間が、主イエスとの出会いによって、神の栄光を表すことになります。

主イエスによって、一人の男の目が開かれました。福音のはじめ、通りがかりに彼を目撃した弟子たちの、「この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか」という言葉にあるように、目が見えないということは、当時家族や本人の「罪」によるものとされてきました。しかし、主イエスはそれをきっぱりと否定し、それは神の栄光が彼に現れるためだと宣言します。そして実際に、彼を通して神の栄光が現されるのです。「あいつは罪人だ」とされていた人間が、神の栄光を現すものとされる。まさに、大逆転です。

大逆転、と言っても、目が開かれた彼は、ファリサイ派から何度も詰問された挙げ句、結果的に共同体から追放されてしまいます。それが一体なぜ、大逆転なのでしょう。彼はそれまで神からも人からも見放された命を生きていたので

す。しかし、追放された地で主イエスをその目で見、信仰を告白した彼は、神とともにある命、神に愛された命へと変えられたのです。いや、そうではない、はじめから彼のことを神は愛していたのです。しかし、人間の思いのなかでそれを否定され続け、生きてきたのです。主イエスはその彼の目を開かれた、というのは、それは「誰が何と言おうと、あたなのことを神は愛している！」という宣言とともに、神の愛が彼に満たされた、ということなのです。「神に愛されていないと思っていたのがそうではなかった！神はわたしをこそ愛しておられた！」彼はなんとうれしかったことでしょうか。これぞ大逆転です。彼は共同体を追放されようとも、神がいない世界から、神の愛に満ち満ちた世界に生きるものとされたのです。

ファリサイ派の人々は目が開かれた男に対し、「お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか」と言いました。彼らは弟子たちと同じように、単純な因果律的に「目が見えない」ということを解釈してしまっています。それどころか、詰問のたびに主イエスに真実に近づいていった「目が開かれた男」とは対象的に、彼らは詰問を繰り返すことで、より頑なになっていってしまうのです。彼らは律法を良く学んでいました。しかしその学びは、律法に込められた神の心を知る、というよりも、人を裁く道具として学んでいたのです。彼らにとって、神とは律法によって裁く神でした。彼らはその神によって、目が開かれた男を裁いたのです。ここに「見える」と言ってしまう彼らの恐ろしさがあります。「見える」という言葉は言い換えれば、「わたしは神がわかっている」ということにほかならず、それはもはや自分が神に成り代わる奢りに他なりません。だからこそ彼らは神に成り代わって他者を裁くことをしてしまうのです。そうなるともはや、目が開かれた男が目の中にいても、それを認めることができません。なぜなら、神をわかっているはずの自分の了解範囲を超えた神の働きがあってはならないからです。それを認めてしまえば、自分が「分かっていない」ことを認めることになるからです。しかし、それに薄々気がついているのでしょうか、自らを壊される恐ろしさから必死に自分を守るように、彼らは詰問のたびに頑なになっていってしまうのです。これこそが、ファリサイ派の人々の「罪」に他なりません。それゆえ、彼らは目の前に神の子がいても、「出会う」ことができないのです。

こうして、見えなかった男が見えるようになり、見えると言っていた人間が見えない、という全くの逆転が起きました。

偉大な霊性家であるトマス・マートンは以下のように述べています。

信仰はまずなによりも知性の承諾である。信仰は知性を完成し、破壊することはしない。信仰は、理性がそれ自体では把握することができない真理を知性に与える。信仰は、あるがままの神についての確信を与える。つまり、信仰は、生ける神との生き生きとした触れ合いに至る道であり、この世の被造物の明白さから三段論法で抽象的な第一根源を考察する道ではないのである。

三段論法の誘惑は、信仰の営みにおいて常に身近にあります。三段論法によって物事を理解しようとするのと同じように、神を知りたい、理解したいがゆえに、神のことをも三段論法的に自分の了解可能な範囲に引き下ろしてしまうのです。応報思想や、因襲的な価値観によって判断しようとすることも同様です。それらでは、神を知ることも、主イエスとの出会いも、他者との出会いもなし得ないのです。弟子たちやファリサイ派の人々のように、わたしたちもまたそれらに囚われていることを強烈に自覚する必要があります。弟子たちやファリサイ派たちとは異なり、主イエスの眼差しははじめから、男のうちに神の栄光を見ていました。その眼差しとともに、「シロアムの池に行って洗いなさい」という招きの言葉を掛けました。そして、それに応えることで、彼の目は開かれました。この男に向けられた主イエスの眼差しは今、わたしたちに向けられています。そしてその眼差しと共に主イエスは招きの声を掛けておられます。この招きの声に聞き従うなら、わたしたちの目は開かれ、神のいる世界、神の愛に満ち満ちた愛された世界へと迎えられます。

神に愛されていない命などありません。神はあなたを愛している！という主イエスの招きの声に応える時、わたしたちは「負の烙印」を押し合う不信感のなかで生きることから解放され、まことに神の栄光の中を生きる命が与えられるのです。